

自然と人の文化

多治見市文化財保護センターだより

もくじ

- ・毛利鎮氏寄贈作品・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- ・永泉寺惣門、普賢寺鐘楼門の文化財指定・・・・・・・・ 2
- ・松原正典氏の聞き取り・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- ・大針 15 号古窯跡発掘調査報告・・・・・・・・・・・・ 3
- ・虎溪山永保寺の防火訓練・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- ・カワニナの調査と草刈・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- ・駅北庁舎ギャラリー展示・・・・・・・・・・・・・・・・ 4



◀制作風景



◀染付山水五題丸皿揃い

毛利鎮氏寄贈作品

平成 26 年の夏に、多治見市無形文化財「染付」の技術保持者であった毛利鎮氏^{まもる}（1924～2014）の作品 10 点を毛利氏のご家族より寄贈いただきました。

氏は、多治見工業高校時代から陶芸の道を歩み始め、江戸時代に市之倉に導入された陶磁器染付画の技術・技法を継承し、美濃焼における染付技術の向上にも尽力されました。作品のテーマは山水画が多く、好んで描いていましたが、決して中国の山水画をそのまま取り入れるのではなく、作品作りに関する研究に取り組み、日本の原風景を思い起こさせる氏独自の世界を器面に表現しています。また、^{ごす}真須の濃淡で遠近感を表現するなど、試行錯誤を繰り返しながら深い経験と高い技術力で制作活動をしていました。稼業として日常使いの製品を作る傍らで、独自の画風を確立しながら作品を作り上げる過程は、まるで画家のような一面も持ち合わせた陶芸家であったように思います。

寄贈いただいた作品は、陶芸家としての円熟期（70～75 歳）に制作され、特に氏のお気に入り大切にしていってらっしゃったものです。この素晴らしい作品の数々を寄贈いただき、感謝申し上げます。

ここに作品の一部をご紹介します。



▲染付山水図角皿



▲染付山水図丸皿



▲陶板染付窯場図

永泉寺惣門、普賢寺鐘楼門の文化財指定

平成 26 年 12 月 18 日に「永泉寺惣門 附棟札」と「普賢寺鐘楼門 附棟札、扁額」が多治見市の有形文化財に指定されました。どちらも大工は多治見市池田町出身の野村作十郎(1815～1871)です。野村作十郎は東濃の名匠として知られており、多治見市指定文化財「甘原神明神社本殿」や市内の永保寺旧坐禅堂など寺社建築を数多く手がけています。

●永泉寺惣門 附棟札

永泉寺(多治見市池田町)は石堂山と号し曹洞宗の寺で、寛永年間(1624～1644)に創建されました。

指定された惣門は天保 14 年(1843)に再建されたもので、本堂の正面で南向きに建っています。桁行 2.7m、梁間 1.6mの薬医門で、瓦葺の両袖塀が二間ずつ付き、東側には潜戸を設けています。屋根は切妻造の棧瓦葺で、門扉は両開きの板戸です。昭和 62 年頃に屋根瓦の葺替えをしていますが、天保 14 年以降、特に大規模な修理は行われていません。このため当初の部材がよく残っています。大瓶束の両側にみられる雲と波、虹梁の北面には波、南面には若葉様の植物、実肘木には波の彫刻が施されています。

永泉寺惣門は多治見市内に現存している薬医門の形式で建立年代がはっきりしている門の中では最も古く、また地元の大工が手がけるなど地域の歴史的価値が高く、重要なものです。棟札は惣門の棟木に打ち付けられており、惣門の再建された年月や当時の大工や庄屋等がわかる資料として価値があり、附指定となりました。



▲永泉寺の惣門



▲笈形の彫刻部分

●普賢寺鐘楼門 附棟札、扁額

普賢寺(多治見市大原町)は象王山と号し、曹洞宗の寺です。寺伝によれば寛文 12 年(1672)の創建で、松本二蓮木全久院十三世の了然玄超の開山としています。

指定された鐘楼門は弘化 3 年(1846)に再建されたもので、普賢寺へ向かう参道の正面に南向きに建つ、入母屋造の一間一戸の楼門です。下層は桁行一間、梁間二間で、正背面の虹梁の外側には波と雲、内側には若葉様の植物が彫刻されています。上層は下層と柱間数が異なり、桁行は下層の一間の内側にさらに柱を 2 本建てて三間とし、梁間は下層の二間の中央柱を省略して一間としています。床を張り、四周とも吹き放して高欄付きの縁が廻り、四隅に擬宝珠があります。組物は外側が平三斗、内側が出組で、格天井の中央からは梵鐘が吊り下げられています。この梵鐘は三代目で昭和 25 年(1950)に鑄造したものです。昭和 34 年(1959)の伊勢湾台風により屋根と上層部が一部損壊し建物が傾いたため、解体修理を行っています。その際に構造補強等を行っていますが、修理前の形とほとんど同じで、建築当初の姿形をよくとどめています。多治見市内で鐘楼門の形式で現存する門は、普賢寺鐘楼門が唯一のもので貴重です。また、伊勢湾台風を経験したという歴史も含め、地域の歴史的価値も高いものです。

鐘楼門に関する棟札は 2 枚あり、1 枚は弘化 3 年の再建のもので、もう 1 枚は伊勢湾台風後の修理の昭和 35 年(1960)のもので、これらは鐘楼門の建築や修理の年代等を知るうえで大切な資料です。また、扁額は門の上層南面に掲げられており、裏面には元禄 14 年(1701)の年号が刻まれています。現在も前身建物の一部が使用されていることは貴重です。どちらも門に関する重要な資料として附指定となりました。



▲普賢寺の鐘楼門



▲上層部の扁額と梵鐘



▲虹梁の彫刻部分

松原正典氏の聞き取り ～大正から昭和の滝呂窯業～

松原正典^{しょうすけ}さんは今年 8 月に 100 歳を迎えられます。平成 25 年に、松原さんから呉須摺り機^{ごす}を多治見市へ寄付いただき（本誌 42 号参照）、その際に、戦前から昭和 30 年頃までの家業のお話を伺いましたので、ここにまとめてご紹介します。

松原さんは、大正 4 年（1915）に滝呂の五鳳製陶所に生まれました。滝呂地区は、明治 30 年代に国内向けの小皿から白磁のコーヒー碗皿へと生産転換をはかり、大正時代には登窯から白磁の焼成に適した石炭窯へと美濃の中で最も早く遷り変わります。そんな中、五鳳製陶所は昭和 30 年代まで登窯を使い続けました。大正時代末には、モロ（工場）に電力をひき、天井に埋め込んだプリー（滑車）で、土練機とロクロ（段グルマ）、呉須摺り機、釉摺り機を動かすようになります。



▲五鳳製陶所 松原正典さん（99歳）

戦前は主に染付の飯茶碗と皿を作り、作業は分業で複数の職人を抱えていました。ロクロ職人は茶碗と皿、それぞれに 2 人ずつ位おり、焼成に使用する匣鉢（エンゴロ）も各自が必要分をロクロで作ったそうです。絵付は、染付の職人（モロエカキ）が男性 4 人、濃み^だをする女性^{はまじるし}が 2～3 人、浜印（高台の裏の印書き）を書く「おじい」が 1 人、スジガキ（線だけをひく）の職人が 1 人いました。登窯による焼成は、戦前は「5 人仲間」の共同窯で、五鳳製陶所は 8 間あるうちの 2 間を持っていたそうです。戦後は、5 間の登窯を単独で焼成し、4 間は製品を詰め、1 番上の 5 間目はエンゴロの素焼きに使用しました。登窯は場所によって火力に違いがあるため、温度が上がりにくい窯奥には「ハグスリ」、窯前は「一グスリ」と、場所によって長石の割合を変えた釉薬を掛け分けたそうです。

焼き上がった製品は多治見の陶器商に販売しましたが、ときには東京から直接の注文もあり、笠原鉄道を使って滝呂駅から貨物列車で出荷したそうです。多治見の陶器商へは荷馬車で送りました。戦前の美濃は、窯屋が陶器商から燃料の割木代などを借金し、製品の売上金から借金を返済する「仕送り窯」が多かったのですが、比較的資本力のあった五鳳製陶所は借金をせずに割木を仕入れることができたため、製品の価格を多治見の陶器商との交渉により決定することができたということで、窯屋の規模などによって、陶器商との関係も様々だったことが分かります。（聞き取り：春日美海）

大針 15 号古窯跡発掘調査報告

場所：多治見市大針町屋作 289 番 1 他 4 筆
期間：平成 26 年 7 月 10 日～10 月 2 日

おおはり
大針 15 号古窯跡の発掘調査は、民間会社による資材置き場の拡張工事に伴い実施しました。窯跡は大針町の国道 248 号線バイパスの北側にあり、尾根に近い標高 160m～170m の南向き斜面の地面を掘りぬいて築かれていました。

窯体の保存状況は比較的良好でしたが、天井部はすべて落ちていました。全長約 9m を測り、最大幅は 2m 余でした。煙道部と焼成室の間には、ダンパーが設けられていました。ダンパーは燃料の燃え方を調整するためのもので、スサ入り粘土を木の棒に巻きつけた粘土棒が左右の壁に近い部分にあるのが確認できました。物原には、窯体の正面から左側にかけて黒色の灰や焼土とともに碗、皿、焼台などが大量に廃棄されていました。碗は高台の先端に^{もみからあっこん} 穀圧痕が付く山茶碗で、皿は高台の無い浅い皿でした。その特徴から鎌倉時代の 13 世紀前半に操業した窯であると考えられます。



▲窯体の全体写真



▲ダンパー部分

虎溪山永保寺の防火訓練

1 月 26 日の文化財防火デーに合わせ、今年は 2 月 1 日に^{えいほうじ} 永保寺の防火訓練が行われました。この訓練は、国宝建造物や重要文化財を火災などの災害から守り、市民の文化財愛護の意識を高めることを目的としています。この日は、付近の林から火災が発生し、観音堂および開山堂への延焼を防ぐという想定で、午前 9 時「火事だー」という雲水の大声を皮切りに訓練が開始されました。火災を告げる鐘の音が辺りに響く中、参加した永保寺自衛消防隊と消防本部、消防団によって放水活動が行われました。

多治見市では、平成 15 年に火災によって永保寺の文化財が失われてしまいました。その経験を踏まえ、永保寺に限らず文化財を災害から守るという意識を忘れないよう、心掛けていきたいものです。



▶消火活動の様子

カワニナの調査と草刈

市天然記念物である「北小木のホタル」の調査の一環として、毎年秋にホタルの幼虫のえさであるカワニナの調査を行っています。今年度のカワニナ調査は11月16日に、ホタルの発生する北小木川と神明洞川の計14地点で行いました。昨年度の調査ではカワニナ数は非常に多かったのですが、今年度は全体的にみると昨年度の約半分くらいに減っています。

これまでの調査によりカワニナ数が翌年以降のホタルの発生数に大きく影響することが分かってきています。ホタル保護に役立てるため、今後も調査を続けてデータを蓄積していきます。

また、この他にホタルの生息する環境を整えるため、草刈を年3回実施しています。そのうち春と秋の2回は地元北小木町とボランティアで行っています。秋の草刈では川ののり面を中心に草刈をしました。参加していただきました皆様には、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。



▲カワニナの採取風景



▲カワニナの個体数調査

駅北庁舎ギャラリー展示 「現代作家たちの逸品」

1階



▲佐分利利成氏



▲(故) 成瀬教三氏

平成27年1月5日、市役所駅北庁舎がオープンしました。駅北地区の利便性を活かし、市民の集まる空間となっています。また美濃焼タイルを建物に多く使用したりと地域の文化・産業に触れることができます。そういった多治見の特性に触れることができる駅北庁舎に、市民の方々や他地域からのお客様に文化財保護センターの収蔵品を見て頂けるスペースが新しくできました。

今回は記念すべき第1回目として、多治見市の誇る現代陶芸作家の作品を1階に2点、4階に5点展示しています。今後定期的に展示品の入れ替えを行っていく予定です。どうぞお楽しみに。



◀鈴木蔵氏



◀加藤孝造氏



◀(故)
荒川豊蔵氏

4階



▲七代加藤幸兵衛氏



▲(故) 加藤卓男氏

〈利用案内〉

開館時間：9:00～17:00 休館日：土・日・祝日、年末年始

入場無料

〈交通案内〉

タクシー：多治見駅から約20分

バス：「美濃焼卸団地」下車 徒歩5分

多治見駅前発 臯ヶ丘9丁目行／可児駅前行

多治見駅北口発 臯ヶ丘9丁目行／可児駅前行

自然と人の文化

No.45 2015.3

編集／発行 多治見市文化財保護センター

〒507-0071

岐阜県多治見市旭ヶ丘10-6-26

TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033

URL <http://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/>

(作成部数1,300部、作成費用24千円)

